
凍える灯(ともしび)

MMMO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凍える灯ともしび

【Nコード】

N4224B

【作者名】

MMMO

【あらすじ】

夜。とある研究所での事件。「彼」の物語が「彼」の預かり知らぬところで始まったその場所は、ひたすらに黒い海だった。

プロローグ（前書き）

大いに批評して欲しいです。

プロローグ

耳障りな音が響き渡り、目障りな赤い光が飛び交う。

そんな上下左右が赤く染まる鉄の壁に囲まれた、息が詰まりそうな通路を、革靴を響かせて早足に過ぎて行く一人の男がいた。彼は壁の前に立ち止まると、その壁に手をかざした。すると無音のままに壁は上へと持ち上がった。

「警報を切れ」

彼は部屋に入っただけで、そう言う部屋は中央へと進んでいった。その部屋は高さ10メートル、幅20メートル、奥行き8メートル程のかなり大きな部屋で、壁一面にはモニターが有り、それぞれが何処かを映し出していて、数十人もの人間が必死な顔でコンピューターに向かっていたり、スピーカーに向かって何か怒鳴っていたりしていた。

コンピューターに向かっていたある男が中央に到った男に向かって言った。

「隊長、^{あい}Iと^{ゆう}Uが脱走しようとしています。」

「ああ、判っている」

「現在、警備に当たっていた何人かの実動部の人間が対処に当たっていますが、僅かに進行の速度を遅らせる程度のことしか出来ていません」

「今の態勢で彼女等を止める事など出来ん。対処に当たっている者を直ちに退かせろ。無駄に被害者増やすな」

「しかし……!」

「今此処で何を言い合ってもどうにもならん。君は対処中の人間に退避するよう呼びかけてくれ」

言うが早いか男はきびすを返し、入ってきた扉を通って廊下へと出た。

彼は走らず、しかしかなりの早足で、革靴を響かせながら荒々し

く進んでいく。

何度目かの角を曲がった時、視線の先に、通路を遮る様な大きな扉があった。そしてその扉に背もたせている男がいた。

早足で歩いて来た男が、独り言を呟く様に言う。

「EとUが逃げ出した」

「ほお、まさかそれが本当だったとはなあ」

明らかに、判っていた事をわざわざ誇張して言っていると判る。そしてその理由も。

早足で歩いて来た男は、顔を悲痛にゆがめ、

「即刻追跡隊を結成し、彼女を追わせてくれ」

「？ 追跡隊？ 捕獲隊じゃねえのか？」

「ああ、付け焼刃で結成した隊では、彼女等には遠く及ばない」

「はっ！ なるほどねえ！」

あざけ嘲る様に言う。

「くつくつ、全く甘いねえ」

「出来る限り早く頼む」

「はいはい、判りましたよ」

そう言つて背を扉から離すと、大きな扉をすこし開き、その僅かに開いた隙間に体を滑り込ませた。その直後に扉の向こうから怒鳴り声が聞こえて来た。

取り残されたように一人たたずむ男は、悲痛にゆが歪めた顔を上に向ける。

其処には空など無い。さらに言うならば、その先何十メートルも空など無い。

しかし彼は、何十メートルも先にある、見えもしない空に向かって、いるかどうか判らない神に祈った。

(どうか……………)

草でできた、黒い海がある。

黒い海が風でうねる。

その海は、当然として、星も月も、空の闇さえも写さず、ただ黒い。

そんな黒の海を切り裂いて行く影があった。

それは二人分の人影だ。

二人とも女性でかなり若い。

長身長髪の女性が少女と言っても過言ではない小さい女性の手を引き走っていく。

それは、美しく、力強く、そして何より鋭利な、そんな走りだった。

彼女達が来た方向に目を向けると、地平線上に星に雑じって、人工的な赤い大きな光が見えた。

それは静かな黒い海に有る、唯一の雑音源でもある。

長髪の女性が僅かに首を曲げ、後ろの光を見た。

そこにまだそれが在る事を認め、長髪の女性は幼女の手を引く力を強め、体をより前に傾け、走りをさらに鋭くした。

小女の足が浮く。

小女の体がその速さに慣れ、また足が地に着こうとするが、長髪の女性が速度を上げ続けるので、それは叶わない。

長髪の女性が歯を食いしばり、「ぎり」という何かが削れる嫌な音がするが、しかし、その足は速度の上昇を止めようとはしない。

(この先にある時間を、必ず手に入れてやる。もうあんな暗くてスカスカな時間は、まっぴらだ。)

明確な言葉として必遂の決意を思う。

一方、激しい速さの中、宙に浮く小女はしかし、振り回される事も無く、まるで自分の意思で空を飛んでいるようにも見える。

幼女の顔が、苦痛の気色を見せる長髪の女性の顔を見て、歪む。

その幼女は背後に顔を向けた。そこには夜空がある。彼女の周りにある黒い海とは違う、宝石を散りばめられたような、深く優しい闇と光の海。

そしてそこにいいるかそうかも判らない神に祈った。
(どうか……)

彼女は一体何なのだろうか？

退避命令が下され、訓練通り銃でけんせいしながら退いた奴は気絶させられた。自分の様に、恐怖で何が何だか判らなくなってしまい、背を向けて逃げ出した奴は助かった。恐らく、戦意が失せると明確に判る奴等は見逃されたのだろう。

あの紅く濁った目。

消えるその長身。

あいつは魔法使いか何かなのだろうか。

この世に存在し、物理法則に縛られているはずのあいつは、素手で銃弾を叩き落した。

ほんの二・三発ではあったが、確かにあいつはそれをやってのけた。

一瞬にも及ばない時間の中で、あいつの腕は銃弾を越えるほどの速度に達した。それはつまり、あの腕が凄まじい加速度を持ったという事であり、それだけの加速度を生むだけの力があの腕に加わったという事だ。

普通の人間と変わらないあの体で、何処からそんな力を生み出したのだろうか。

普通の人間と変わらないあの腕で、何故そんな加速度に耐えられたのだろうか。

そんな力を無理に出せば、体の至る所が崩壊する。もしそんな力を出せたとしても、腕はその加速度が生み出すGによって破碎するだろう。

あいつは人間でも、さらには化け物ですらないのかもしれない。

この世の法則から逸脱した存在。

悪魔。

二部・一先ず出会う(1)

時刻時は23・02。

街灯や建物の灯りのせいで夜の闇は中途半端で、星の輝きは無い。唯一月だけが輝き、空という物が存在していると訴えている様だ。そんな闇の中、とあるコンビニエンスストアから一人の男が出てきた。

コンビニからの逆行により輪郭しか見えないが、かなり背は低いようだ。

「全く、最近は物価が高くてなまってしまっていかな。昔は色々もつと安かったのにおう。」

御役所はわし等の事を真剣考えてくれているんだろうか？」

ぼそりと言ったそいつは自分の家へと向かって足を向けた。右手には膨らんだビニール袋を携えている。

「いや、そんなはずも無いか。官僚の若僧にわし等の苦しみなど判るはずもないか・・・。」

先ほどの言葉の続きを漏らす。

靴音のリズムから歩幅はかなり大きい様だ。足も長いのだろう。

と、突然その単調なリズムが途絶えた。

彼の前には真つ暗の道がある。其処から先は一本道であり、突き当たりは行き止まりである。そこが自分の家だ。しかも不思議な事にこの先の道には家への入り口が無い。全ての家が背を向ける様に家の後ろ側をこの道に向けている。

つまりこの道は、他の家の背と後ろ側の塀によって作られた、隠し通路の様な道なのである。無論、家までの8・90メートルの間、街灯など一つも無い。此処は正式な『道』として政府に認知されていないのである。

ちなみに、彼が向かっているのは家の門はもちろん裏口である。たいていの場所から帰って来る時にかなりの近道になるので使って

いるだけだ。彼の家は普通だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大丈夫。この不安はただの思い込みだ。この闇の中に得体の知れない何かなどいるはずが無い。いつも何とはなしに此処で立ち止まってしまうが、毎回何もないではないか。今回も通り過ぎた後で、「いい加減に慣れるよな、自分」と思うんだろう。そうに決まっている。自分は臆病者だからな、こんな変な考えが浮かんでしまうんだろう。

・・・大丈夫、大丈夫、大丈夫。

自分に暗示の様な者を掛けて、地面にへばり付く足を無理やり持ち上げる。しかし、

「動くな」

冷淡な声が響き、男の時間が止まった。

意識、思考、理性、本能、脳の活動から生命活動まで、その瞬間だけ完全に停止していた。

「貴様、何者だ」

次の言葉で生命活動は復活した。

その0・5秒後、脳の活動が復活した。

その5秒後、やっと精神活動が復活し、思考が始まった。

暗闇に響いた二語を理解したのは、それから10秒程経った頃だった。

しかし理性が働き始めたがために、恐怖がじわりじわりと脳髄に染み込んで来た。

先ほど言葉を発せられ無かったのは、体の不具合による所が大きかったが、今は精神の不具合によって、言葉という物が意識できなくなっていた。

男は闇から目を離す事も、微動だにする事も出来なかった。

5秒、10秒、30秒、そして無音のまま1分が過ぎたころ、やっと微かな動きが起こった。音を一切立たなかったが、

声の主が光の影響圏に僅かに足を踏み込んだのだ。

(紅い)

そこに現れたのは、女性だった。

紅く濁った瞳の切れ長の目、黒く艶の無い長髪、半袖の服から出た滑らかな腕、ジーンズを穿いた足も長く美しいラインを描き、身長は自分より30センチ以上も高いだろう。その背にもう一人分の人影があつたが、暗くて良く見ることは出来ない。

それを見た瞬間、男は安堵の余り腰が抜けそうになった。

(なんだ、人間ではないか。驚いて損をしたわい。いや、損をした訳ではないが、どつと疲れてしまったのう)

緊張で今にも失神しそうだった男の雰囲気がかんし、柔和な雰囲気男の周りに満ちる。

「お主等こそ何者だ？ 人に名を尋ねる時はまず自分から名乗るべきではないのか？」

柔和な雰囲気のまま、世間話をする様に言つ。

彼は、『何時如何なる時どんな状況だろうとも人間相手ならば大丈夫』、という何だか良く判らない、偏った考えの持ち主なのだ。一体何が大丈夫なのだろうか。

一方、鋭い雰囲気と視線を持った女性は、再度同じ言葉を発しようとしたが、止めた。というより、驚きで何も言えなくなってしまうたという方が正しい。

その理由の一つは、闇の中からは輪郭すら見えず、こうして近づいた今何とか見えた人間が、子供だったという事だ。

150も無い身長、完全に閉じきっている訳ではないがかなり細かい目、其処から覗く瞳は悟っているように澄んでいる。長袖の服から出ている手はプニプニと柔らかさそうで、髪も短いが触り心地は良さそうだ。小学校高学年か、高く見積もっても中学一年生ぐらいに見える。

二つ目の理由は、今の今まで緊張と不安に彩られていた少年の雰囲気が突然しかんし、堂々と話し始めた事だ。何か自分は少年が落ち着く様な事をしたのだろうか。

(こんな奴があいつ等の仲間はず無い。全く、自分は何をしてるんだ)

一通り驚いた後、顔に出さずにそんな事を考える。もちろん驚きも顔には一切出ていない。その間2分程。

そして再度少年の声が響いた。

「ん？ 怪我でもしておるのか？ 大丈夫か？」

何時まで経つても動かない事に疑問に思ったのか、緩い雰囲気のまま一步を踏み出す。が、「動くな」の一言でその歩みは半歩で止まった。長髪の女の雰囲気が殺気とすら思えるほどの鋭さを帯びる。(何を油断しているのだ自分は。こいつが安全な奴だと決まった訳でもないのに。)

自分をしった叱咤し、意識を再度研ぎ澄ます。しかし相手は、止まりはしたが緊張している様子は無い。ただ細い目の奥にある瞳は、彼女等をしつかりと観ていた。

「本当に平気か？ 何かわしにできる事があつたなら、やってやらないでもないぞ？」

再度足が前に出る。が、また「動くなと言つただらうが」の一言で歩みが止まる。今回は半歩も進まなかった。

長髪の女性が放つ物が、明確な殺気となった。

こんな状況にひょうひょう飄々と付いて来られる一般市民など普通はいない。殺気に足を竦ませる事も無く、完全な無拍子、無意識無殺気が出されたあの足が、もし技だとしたら、かなりの危険性がある。これは改めて気を引き締めなければならぬと思うのも無理は無い。

二人の男と女の間で、第三者から見えるほど明確に雰囲気がかかっている。まるで雰囲気がお互いに相手の雰囲気を飲み込もうとしているようだ。

「やはりわしの事など信用できんか。まあ当たり前ではあるが、悲しいのう。」

がっくりと頭を落とし、腰を曲げ、手をだらりと下げながら大げ

さに言う。

しかしすぐにはっと体を起こし、やや胸を張り、

「仕方が無い。ならばせめてこれを置いて行こう。食い物やら包帯やらが入っておるから、気が向いたら使ってくれ」

言いながら携えていたビニール袋をその場に置き、すぐさま回れ右をしてさつさと来た方の道の闇に消えて行ってしまった。

（もう一度あのコンビニへ行ってから、遠回りをして正面玄関から入るとするか）

彼が闇に消えてから百瞬程も女性二人は動けなかった。彼が身を勢い良く体を起こした時、彼女等は戦闘態勢に入っており、次の瞬間には避ける事も飛び掛ることも出来るようにしていたのだが、予想を大きく外れた事が起こってしまった為、動くに動けなくなってしまうのだ。

「・・・・・・・・」

「何だったの、今の？」

「いや、私にも判らない」

影に隠れていた小女が、長髪の女性に尋ねた疑問は、だから全く持って当たり前のことだ。

二人は置き去りにされたビニール袋へ歩み寄り、躊躇の後に結局それを手に取った。

そして二人の女性も闇の中に消えていった。

二部・一先ず出会う(2)

円に近い形をし、中央部に市街地、そしてその周りを取り囲むようにして色々な店、ビル、公共施設が立ち並ぶ市、四至菜土市^{よしな}。

そこは第二次世界大戦後の日本の中で、特に急激な発展を見せた都市である。

法律がきちんと制定し直されていない、都市計画などで考えられていない時期に発展を遂げたその都市は、表通りは広く見栄えも交通の便も良いが、裏路地は難解な迷宮になっていたり、人一人入るのがやつとの幅しか無かったり、という状況だった。

木枯らしの吹く十一月の終わり、そんな町のビル群の一角に、天^あ井田凍火^{まいだ}、その人が居た。

彼の特徴といえば、無表情なのに何処か笑っているように感じる細目の表情と、その小学生の様な容姿と体系に似合わないお祖父さんの様な古いしゃべ喋り方と、頭に何冊もの本を乗せ、さらに幅20センチ程の平均台の上を歩かせても平気そうな美しい歩き方である。

そんな彼は今年の十月で15歳になった。

つまり今は現役高校受験生な訳だ。

しかしだからと言って息抜きは必要であるし、家でずっと閉じこもって勉強するのも精神的に効率が悪いので、彼が通う学校と市街地を挟み反対側にあるこのビル街にいるのも別に変ではない。

……今日が休日ならば。

そう、何を隠そう今日は水曜日である。無論祝日などではない。

しかも現在の時刻は11・30。学校などもうとつくに始まっている。

なのに何故彼はこんな所に居るのだろうか？

実はこれは彼の習慣であり、小学生三年生の後半ごろから続いている。

四至菜土市はなかなか大きな市であり、小さな悪事を働く近頃の若者も多々居るわけであり、かつあげやら親父狩りやらホームレス虐めやらが毎日のように行われているのである。

彼の習慣とは月に二・三度平日にビル街に赴いてはそんな人達を助ける事である。

手順としては、ま先ず被害者になりそうな人か加害者になりそうな人を探し出し、後をつけ、事が起こったらちよちよいと助け出し少し感謝される、というような感じである。

ちなみに今まで彼がつけた人は100%事件に巻き込まれているし、そこからその人を助け出すのを失敗した事も無い。怪我はしたことがあるが。

彼はその位の事をその気になれば誰でも出来る事だと思っているが、もちろんそんな事は無い。が、出来る人の中には、そんな風に感じる人もいるだろう。

しかし数千数万単位で人が行き交う街の中から、百人にも満たないそんな人達を百回以上連続で探し出し、それが一度たりとも外れないなんて芸当は、一般市民などには出来るはずも無い。彼のそれは才能であるが、本人は気付いていないのであった。

大きな四つのビルによりできた交差点の一角に、そんな彼は居た。未だ本日の標的は決まっていなかった。

反対側車線まで7・8メートルもある大きな車道を挟んだ向かい側の歩道や、対角線上の一角を0・2の視力しか持たない目で眺め、いつも通り何かの事件に関係しそうな雰囲気を持った人を探す。

と、居た。

今、青になった横断歩道のこちら側に歩いて来ている、他の人間達と僅かに違った空気を持った集団が。

彼が『集団』と思った四人は、格好はバラバラで、間の距離もかなり開いている。さらにはそれぞれの人間が完璧に街の空気に溶け込んでいる。しかし、完璧に『普通』のその人々を凍火は何故か一まとめりに感じ、何かが『異常』に感じた。

他の人間と空気を合わせようとしている所が、いつも相手にしている人より手強そうだ。

「なかなか危うそうな奴らだのう」
小さく呟く。

しかしその言葉とは裏腹に一時も迷う事無く後をつけ始める。

彼はそんな人間だった。

二部・一先ず出会う(3)

「はあ~~~~」

気だるそうな溜め息が、ズボンを穿いた私服姿の短髪女性から漏れる。

その声に答える声があった。それは彼女の後ろ10メートル程の所からの物だ。

「不自然な行動を取るなど言っただろうが」

パンクな格好をした若者の声だ。

「しかしですね、隊長。EとUの潜伏している可能性のある土地の面積知ってますか？ 約27万平方キロメートルですよ？ 日本の国土面積の3分の2以上ですよ？ そんなでもって私達実働部隊がその範囲を200以上に分けて搜索してまずけど、それぞれの担当区域に彼女らがいる可能性つて0・5%以下ですよ？ それにですね、私達以外の小隊が発見したとしても、報告すら出来ないままやられちゃいますって。やっぱりこんな事不毛ですよ」

そこでまた長い溜め息。

「確かにそうだ。しかしそのシミュレーションは奴等が一時も休まず全力疾走をし続けた場合の範囲だ。奴等の場合、肉体的にはそれは可能だが精神的にはかなり無理がある。ゆえにあそこから半径五千メートル程の15の区域にいる可能性が五割、つまり一ヶ所に着き3%以上の可能性で居る事になる。さらに我々の担当している範囲にいる可能性は5%以上。

重要な位置を任されたからにはそれなりの緊張感を持って。それからな」

そこまでを淡々と語り一泊の間。最後の言葉は大きな威圧感を乗せてられて放たれた。

「任務の時の隊長命令は絶対だ。どんなささい些細な事でも逆らうんじゃねえ」

女はその余りの威圧感に体をビクツと震わせ、歩みが一瞬乱れる。しかしすぐに立て直す。

彼女は今、普段からそんじょそこらの若者っぽい感じで過ごしている隊長が、真面目と言うか、真剣と言うか、今にも殺気を放ちそうなほどピリピリしている事に驚き、怯えていた。

彼女はこれが初めての、さらには最重要研究対象のIとUの搜索、可能なら捕獲という大変大事な任務であったため、とても緊張していた。

(もつとしつかりしないと！)

と気を引き締めた時、もう一人の隊員が口を開いた。

なお、この一連の行動は、30センチ離れた位置からさえやっと聞き取れる程度声で、さらに傍目からは全く口を動かしていないように見えるほど口を動かさずに行われた。

まあつまり、こいつ等はただもの只者ではないと言う事である。

薄暗く狭苦しい通路を進む、二つの影が在った。

アイIとユウUだ。

黒く艶の無い髪をなびかせながらIが先行していき、その後をUが着いていく。

Uは、微かに灰色掛かった髪と、140程の身長、そして幼い小さな手足、口、目をしてしたが、瞳だけがととても大人びていて、嫌にその様相と合っていないかった。

此処は四至菜土市の裏路地。そこはまさに迷宮だ。

行き止まり、十字路、Uターンなどが幾つもあり、一体此処が何処なのかも判らない。

しかしそこは彼女等にとって、迷宮でも何でもない。何故なら、その迷宮からは常に空が見えているからである。

幅70センチ程の狭い道という状況は、彼女等にとって階段と同

じなのである。

上から銃撃でもされれば危険な場所だが、見つけられる事がなければそうなる事もない。このような場所なら、遭遇したとしても相手が逃げる前に倒す事も出来る。

その前に此処に探しに来る奴などいないだろう。此処はかなりの安全地帯なのだ。

そんなこの場所を彼女等が今移動しているのは、隠れ家としている場所に帰るためである。

(あ、)

Uはお腹に違和感を覚えた。恐らく、昨夜不思議な少年に会い、少量の食物を貰い食べたせいだろう。つまりこれは空腹感なのだ。

そのわず僅かな苦痛に下手に食事しなければよかったと反省を覚えたが、しかし後悔の念は無い。あの少年はやや奇妙だったが、打算も何も無く自分達の事を案じてくれていたと思う。故に後悔の念は無いのである。

「どうかしたか？」

先行するIが言った。物思いにふけ耽っていたせいで歩みが緩んでいたらしい。

小走りにIに追いつく。

「何でもないよ、大丈夫」

「そうか、しかし何かあったらすぐに言ってくれよ。お前が苦しむ世界なんて、私には何の意味もない。だから私が全力でお前の苦痛を取り除いてやる。」

憂いと寂しさを乗せた声と共に手を伸ばす。その手をUがとり、微笑む。

「うん。判ってる」

二人は進んでいく。暗く狭苦しく先の見えにくい通路を、手をつないで。

闇に染まりかけた前方は、そこが美しくない場所である事だけを教えてくれる。

Uはただ、Iといる事を望み、共に進む、又は止まる事を望んでいた。

何があるうと、何もなくても、Uは幸せなのだ。Iと共に在る事が出来さえすれば。

しかしIは立ち止まらない。

その先に在る物を求め、行く。

誰も気付けはしないが、その状況の全ては、神のいたずらと言得てしまうほどに、彼女等の現状と未来を正確に具現していたのだ。

(やはり、怪しい)

凍火は、つけていた『集団』の怪しさを目撃していた。

彼等は何度も別れた。四人バラバラになる事もあった。しかしその後、三つも角を曲がらない内にまた合流するのである。しかもそんな事が二・三度ではなく、七度も続いたのである。

(ぬう〜)。これはさすが流石に)

バレバレだ。と思おうとして思考が止まる。

初めに感じた危うさ。統率された集団行動。そして変装。これらの事実より導き出される答えは、彼等が明確な目的を持った集団だと言ふことだ。即ちプロの可能性が高い。そんな奴等がこんなあからさまに怪しい事をするなんて、何かがおかしい。可能性として考えられる事は、

「あの者達がわしの尾行に気付いており、警告している?」

ぼそりと口に出した言葉は、10メートル先にいる彼等に聞こえていた。

が、何の反応も無い。

僅かな隙も見せない。まさにプロ。しかしその事実を知るすべ術を、凍火は持たない。

(さて、どうするか)

遅くならば早いほうが良いだろうに、表情にも態度にも微小な変化さえ現れず、迷う風も無く歩みも乱さず、ただただ追う。

(まあ良い。一度決めた事だ)

彼は迷いや悩みを顔に出さない事が出来る様な人間ではない。本当にみじん微塵も迷っていないのだ。先ほどの彼の迷っている風な思考は、彼がわざと形だけ行っただけのものなのである。

彼はそんな芝居がかった事をするのが好きなのだった。

彼の標的たる四人が人の少ない道に入った。といっても一人もいない訳ではない。ゆえにいきなり暴拳を振るう事も無いだろう。

彼等は進む。

しかしだんだんと気配が消えていく、・・・ように見える。凍火はそんな事を鮮明に感じられるほど物事を極めた人間ではない。

(いよいよ、危うくなって来たようだな)

四人がかす掠れて行く。そしていよいよ、消えた。

気配が、ではない。裏路地に溶け込むように入ってしまったのである。

(遅くなら、此処だろう。しかし、まあ良いか。)

大して考えもせず歩を進める。

人によつてはこいつが大馬鹿者に見えるかもしれない

しかし彼は行く。

不迷のままに。

口には微小を携えて。

歩みは速く、堂々と。

やや熱い雰囲気をまといながら。

その暫く前、と凍火がつけていた四人の集団はこんな会話をしていた。もちろん超小声で。

「尾行されています、隊長」

と学生姿の少年風の男が言う。

「ああ、判っている」

その言葉に私服姿をした短髪の女性が驚く。

しかしもちろん、多少敏感な人でも気付けないほど拳動の乱れはない。彼女はそういう訓練を受けているのだ。しかしそれにも、同じ隊に属する仲間が彼女の驚きから、気づいていなかったことに察する。

「お前から見て7時の方向だ」

老人風のひげの長い男が言い、私服姿の女は気を引き締めようとしたり矢先に注意を受け、意気を落とす。しかしもちろん、次の曲がり角で尾行者を確認する事は怠らない。

「あんな子供が、ですか？」

多少の驚きと疑惑を乗せ、確認の言葉を紡ぐ。

「ああそうだ。それで隊長、どうしますか？」

「何か疑わしい事をした後、裏路地にも入るぞ。遊びでこんな事をやっているなら、それで引くだろう」

この任務は絶対に、一般市民に詳細を知られてはならないのだ。

故にわざわざこんな事をしなければならぬ訳だ。

彼等は、『ロジック』と呼ばれる、非公認の研究機関の実働部に所属する者達だ。

特に私服姿の女性は、その並々ならぬ格闘の才能を見込まれ、一生遊んで暮らせるほどの大金と引き換えに、5年間その研究所に勤める事を契約している。

そこそこ格闘の経験を持った男が数人集まってもかな敵わないほどの格闘のセンスを持っている

その女性は、まだ15にもなっていない。しかし今は化粧と服装とそこそこの身長のおかげで、そんなに幼くは見えない。

「……はい」

三重の意気の入った声が比較的大きな声で放たれた。

しかし気付ける者はいない。

そして事態が微かにだが確実に、動き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224b/>

凍える灯(ともしび)

2010年10月9日23時12分発行